

賢人たちの年代別人生論

	孔子 B.C.551～449 人生を振り返り	世阿弥 A.C.1363～1443 芸能論	ゲーテ A.C.1749～1832 心を動かすもの
10歳			菓子
	学問を志す	役者として最初の壁	
20歳			恋人
		一生の芸が定まる時期	
30歳	自分なりの考えを確立		快樂
		芸の絶頂期	
40歳	世間に惑わされなくなる		野心
		衰えが隠せない時期	
50歳	天命を悟る		貧欲
		何もせずとも 花が残る役者でありたい	
60歳	ありのままを受け入れる		
70歳	直感に頼っても 道を外れることがなくなる		

世阿弥「風姿花伝」

- ▶ 室町時代の能の大成者、世阿弥の能楽論。
- ▶ 第1章「年来稽古条々」は年齢別の稽古の心得。
- ▶ 世阿弥は人生を7分割
7歳、12～13歳、17～18歳、24～25歳、34～35歳、44～45歳、50歳以降。
- ▶ キーフレーズ
 - ▶ 時分の花 その時かぎりの魅力
 - ▶ まことの花 決して散ることのない魅力

一期の芸能の定まる初め（24～25歳）

24,25歳の頃は、一生の芸が決まる初めの時期と世阿弥は説く。

「見る人の一旦の心のめずらしき花なり。」

デビューしたての頃は周囲の称賛を得ることもあるが、それは一時的な珍しさのもたらす魅力にすぎない。もし、本人が勘違いしてしまうと、

「時分の花をまことの花と知る心が、真実の花になお遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この時分の花に迷いて、やがて花の失するをも知らず。初心と申すはこのころの事なり。」

一時的な魅力(時分の花)に自分を見失っていては、後に本当の魅力(まことの花)を手にするのは難しいだろう。

盛りの極め（34～35歳）

34,35歳の頃は、芸の絶頂期と世阿弥は説く。

「この時分に、天下の許されも不足に、名望も思ふ程もなくば、いかなる上手なりとも、いまだまことの花を極めぬ為手と知るべし。」

この時期までに世に認められなければ、「まことの花」にはほど遠い。

「上がるは三十四五までのころ、下がるは四十以来なり。」

芸が向上するのは、34,5歳まで。40歳以降は落ちていくのみ。

そして44～45歳の時期に衰えてなお、輝くものがあれば、それこそが「まことの花」であると世阿弥は説いている。

徒然草の「いつやるか？ 今でしょ！」

▶ 兼好法師が鎌倉時代末期に書いた「徒然草」は日本三代随筆の1つ(残りの2つは「枕草子」「方丈記」)

▶ この世の無常を知り、今を生きることの大切さを説いた

「必ず果たし遂げむと思はむことは、機嫌を言ふべからず。」(155段)

「一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いずれか勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事を励むべし。」(188段)

胸のうちに「これ！」と決めたものがあるのなら、タイミングを選んだりせず、今すぐやりなさい！ と兼好法師は説いた。

今日が人生最後の日だとしたら

スティーブ・ジョブズ(1955～2011)は2005年のスピーチでこう語った。

“I’ve looked in the mirror every morning and asked myself: “If today were the last day of my life, would I want to do what I am about to do today?” And whenever the answer has been “No” for too many days in a row, I know I need to change something.”

ジョブズは2004年8月にすい臓がんの手術を受けた。いつ燃え尽きるか分からない自らの命への切迫感が、iPhone(2007)やiPad(2010)を生んだのかも。

「寸陰惜しむ人なし。・・・刹那覚えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終ふる期、たちまちに至る。」(徒然草108段)

人生は一瞬(寸陰・刹那)の積み重ね。そんな一瞬を惜しまず、意識せずにいたら、たちまち一生が終わってしまう。